

# 音 韻

大橋 純一

## 1 はじめに

ここでは2006年に行った気仙沼市方言調査のうち、筆者が担当した音韻調査項目の結果について報告する。対象とするのは、

- 1) /i/ /e/の実相 (「息」/iki/・「駅」/eki/)
- 2) /si/ /su/の実相 (「梨」/nasi/・「茄子」/nasu/)
- 3) /-ai/ /-oi/連母音の実相 (「高い」/takai/・「細い」/hosoi/)
- 4) 語中/k-/ /g-/の実相 (「開ける」/akeru/・「挙げる」/ageru/)
- 5) 語中/t-/ /d-/の実相 (「旗」/hata/・「肌」/hada/)

の5項目である。いずれも実相上の混同や融合、弁別の有無などを見るための基礎的なものであるが、当該方言の音韻特徴を捉える上では、またその特徴を東北諸方言のそれと対比的に見る上では、欠くことができない項目でもある。以下には、これらの世代的な実態を音響分析結果を踏まえながら明らかにする。なおそれに際しては、隣接地域を対象に行ってきた既調査(東北大学国語学研究室調査)などの実態も適宜参照し、当該方言の現状がそれらとの対照の中でどのような位置を占めるかについても言及していく。

## 2 調査・分析法

調査対象者は高年層22(男性12・女性10)、中年層16(男性9・女性7)、若年層14(男性6・女性8)、少年層20(男性10・女性10)の計72名。<sup>注1</sup> 調査は“くつろいだ場での発音”であることを条件に、上記の1)～5)に掲げる調査語を謎々形式で尋ね、注目する音節箇所を発音を抽出する形をとった。いずれも1語につき2回以上の発音を求めているが、3)～5)に関しては各音の融合や弁別の有無などを確認することを必須とし、当初の発音と異なる内省が得られた場合には再度それによっても2回以上の発音を求めている。また1)と2)についても当人の回答状況に応じて音の印象などを聞き、異なる内省が得られた場合には同様の対処をとることとした。

以上により、本調査では1人1語につき複数の音声採取されたことになるが、上記のような事情からも、その各々は必ずしも対等に扱えるものとは見なされない。各語2回以上の発音を求めているのも基本的には録音の不備を補うためのものであって、各発音の差や平均値を求めることを積極的に意図しているわけではない。よって本報告では、上記の1)～5)の実態を抽出された実相をもとに論じていくが、その際に取り上げるのは最終的に得られた発音(その中でも特に録音状態のよいもの)のそれである。

得られた発音は主として筆者の聴覚判断に基づいて分類していく。ただし実相の判断が難しいも

の、あるいは各実相の特徴を代表的に表していると思われるものについては「音声録聞見 for Windows」(DATEL)を用いて音響分析を施す。具体的には母音の調音点と子音の調音法を特定するために、前者ではフォルマント値を、後者ではスペクトログラムを抽出するものである。なお、フォルマント分析では該当する母音区間の2か所以上を計測し、それぞれの数値の平均をもって当該音のフォルマント値と定めることにした。

### 3 調査結果

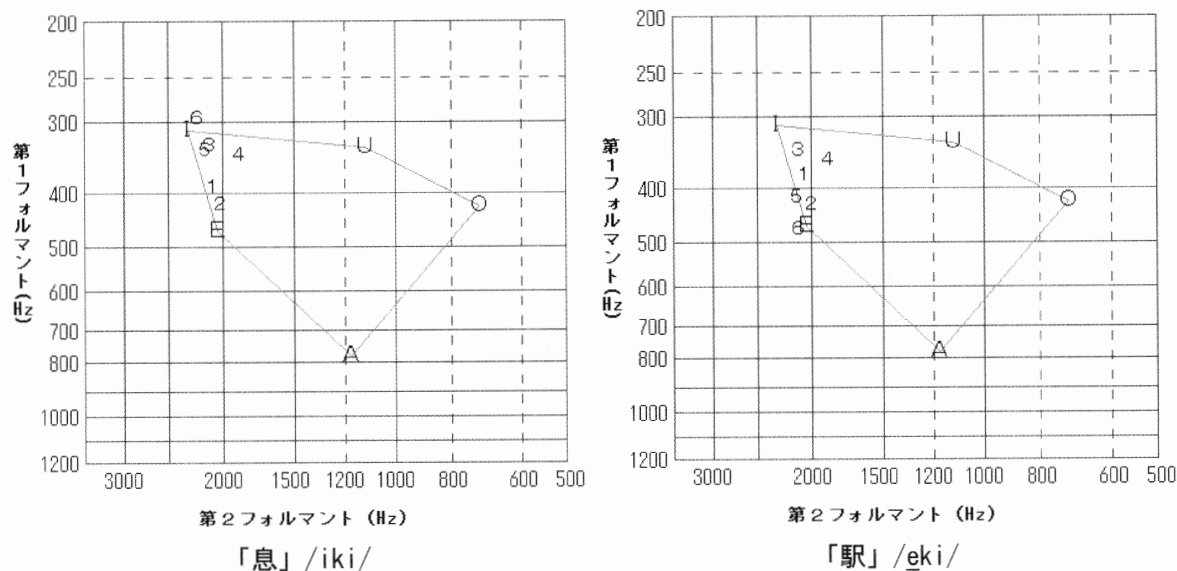
#### 3.1 /i/ /e/

/i/と/e/が混同・合一化する事態は、東北方言が全域的にそうであるように、当該方言においてもきわめて顕著である。特に高年層では両音に区別が存しないか、さもなければ相当に近似した相に現れることが一般的である。ただし、合一化の方向や近似する度合いは同じ高年層においても多様であり、その特徴を一律に単純化して捉えることは難しい。図1は、そうした多様性について、各パターンを象徴する高年層男性6話者の実態を例に、F1-F2図上で視覚的に見比べたものである。

図1 高年層6話者「息」/iki/・「駅」/eki/の実相

F1-F2図 凡例

- ・ I E A O U : NHK男性アナウンサー10名の5母音フォルマント各平均値
- ・ 1~6 : 高年層6話者各個人の「息」/iki/・「駅」/eki/フォルマント値



図は縦軸に第1フォルマント、横軸に第2フォルマントの値をとり、その交点から各母音の調音位置が求められるように作られている。また、各交点を結んでできた五角形はおおむね人の口腔内を左側面から捉えた断面図に相当しており、これによって舌の高低(縦軸)や前後(横軸)の様相

が視覚的に把握できる仕組みになっている。図は、凡例にあるとおり、NHK男性アナウンサー10名の母音平均値（I～U）<sup>注2</sup> に対し、高年層6話者の「息」/iki/・「駅」/eki/（各1～6）がそれぞれどのような位置を占めるかを見たものである。

それによれば、高年層の/i/と/e/には次のような実相パターンが併存することがわかる。

a. /i/と/e/の区別なし

a-1. /i/と/e/の中間相で区別なし（図上の1）

a-2. /e/寄りの相で区別なし（同2）

a-3. /i/寄りの相で区別なし（同3）

a-4. /u/寄りの相で区別なし（同4）

b. /i/と/e/の区別あり

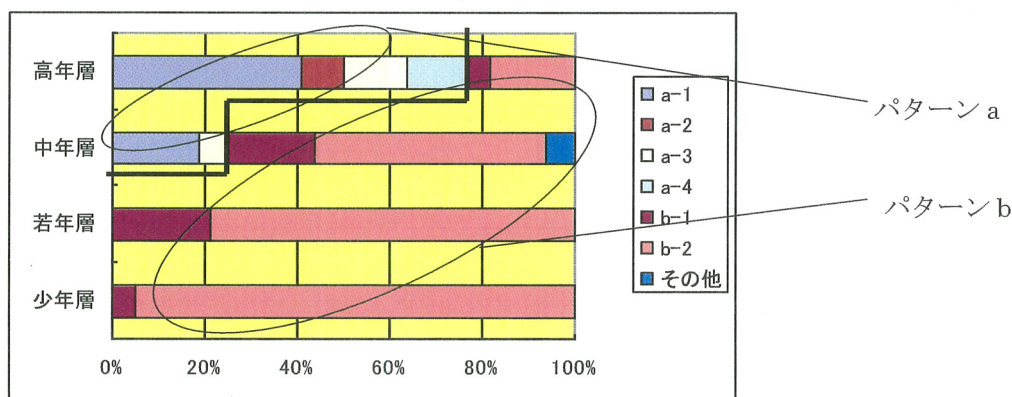
b-1. /i/と/e/が相互に寄り合った相で区別あり（同5）

b-2. /i/と/e/がともにアナウンサー平均値にほぼ重なる相で区別あり（同6）

すなわち高年層においては、/i/と/e/を区別しないaの状況を主体としながらも、実際には/i/と/e/との間（a-1～a-3）と/u/との間（a-4）とを縦横自在に行き交いつつ、多様なバリエーションが許容される中で、各個人が思い思いに合一化の様相を呈していることがうかがえる。<sup>注3</sup> bの状況も含めたその複雑な様相は、たとえば近隣の石巻市方言（大橋純一 2003）などと比較してもかなり特徴的であるといえる。ただし、実相パターンがこのような多岐にわたるにも関わらず、それらに対する当人たちの音意識はむしろ稀薄であり、「区別がない」、「ほとんど同じ発音になる」といった内省が得られる他は、その実際音が「エに近い」のか「イに近いのか」といった点でのこだわりはほとんど示さない。その意味では、高年層の場合、近接する母音どうしが広狭・前後の関係で混同をきたし、自身の合一化音さえ特定しがたいほどに区別が曖昧化している現状こそを重視すべきもののように思われる。

しかし一方、上記の状況を世代を降って順に見てみると、高年層で主体であったaの状況が中年層の過渡的状況を経て、bへと一変していく様が明瞭である（参照、図2）。<sup>注4</sup>

図2 各世代における「息」/iki/・「駅」/eki/の実相



これによれば、高年層段階で許容された多様な合一化の在り方が、次段階の中年層で早くも a-

1 か a-3 かに集約されるに至り、全体的な割合の面のみならず、そのバリエーションにおいても急速に高年層的な特徴を落としつつあることをうかがわせる。ただし、中年層にはその高年層でさえバリエーションのない「その他」(/i/が/u/寄り、/e/がアナウンサー平均値にほぼ重なる相で区別あり)の状況を示すものがある。おそらくは a-4 ~ b-1・2 にかけての過渡的な様相を示すものと思われる。また、当年層の話者からは「自分は紛れない(区別する)と思う」としながらも、「そのような(紛れた)発音は同年配でもよく聞く」といった内省が得られる場合が多く、その点においても過渡的であるといえる。他方、若・少年層では/i/と/e/の発音が自方言で特徴的である(混同ないしは区別されない傾向がある)ことについての自覚は示しながらも、当人たちの発音にそれらの要素を感じさせるものはほとんどない。おおよそこの世代が当該方言の音韻特徴を二分する境目といえそうである。

このようであり、/i/と/e/の混同・合一化に関しては、当該方言の場合、高年層においてこそ複雑・多様な現状にありながらも、実質的には図2における左上部の小域にその痕跡を確認できる程度に過ぎない。見方を変えるならば、図上のbの領域が高~中年層にかけてaの領域を急速に浸食しつつあり、それらが若年層以降においてbへと一変していく姿と受け止めることができる。今後、図上のaの領域は、さらに左上部へと押しやられていくことが必至である。

### 3.2 /si/ /su/

/si/と/su/の区別が曖昧となり、双方いずれかの音節に合一化する事態は、先の/i/と/e/の場合と同様、東北方言を象徴する音韻現象のひとつとされてきた。当方言が「ズーズー弁」と代称されるのも、直接的にはこの現象によっている。しかし近年、その実相が同一地域であっても/si/(/su/)に合一化するもの、その中間相で合一化するものなど、複雑な様相を呈することに加え、両音を中舌音として、さらには共通語音としても区別するものが見られつつあることが報告されている(大橋純一 2000a・2007b ほか)。図3は、そうした東北方言の全体的な動きの中で、当該方言がどのような現状にあるかを、パターンとして分別できる高年層男性6話者の実態を例に、F1-F2図上で視覚的に見たものである。図は、既見の図1と同様、NHK男性アナウンサー10名の母音平均値(I~U)を基準に、高年層6話者の「梨」/nasi/・「茄子」/nasu/ (各1~6)のフォルマント値をプロットして見比べている。

それによれば、高年層の/si/と/su/には次のような実相パターンが併存することがわかる。

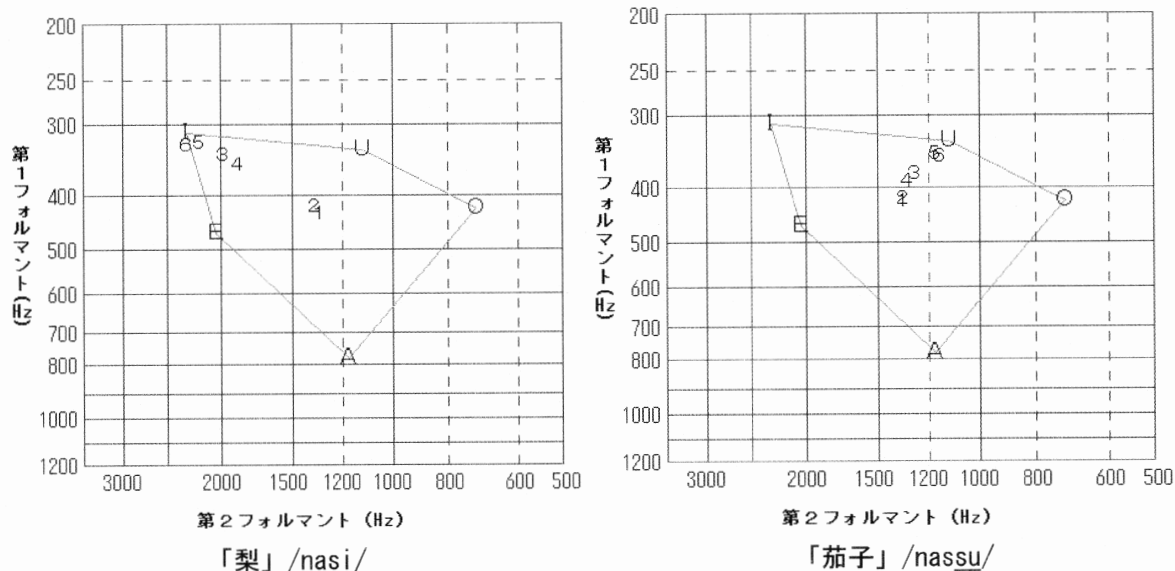
- a. /si/と/su/の区別なし
  - a-1. /su/寄りの相で区別なし (図上の1・2)
- b. /si/と/su/の区別あり
  - b-1. /si/と/su/が相互に寄り合った相で区別あり (同3・4)
  - b-2. /si/と/su/がともにアナウンサー平均値にほぼ重なる相で区別あり (同5・6)

つまり当年層の場合、/si/と/su/を区別しないaの状況は結論的にはa-1(/su/寄りで一致)のみであり、たとえば大橋純一(2000a)(2007b)の岩手県中北部、新潟県北部などに多見されたような

図3 高年層6話者「梨」/nasi/・「茄子」/nassu/の実相

F1-F2図 凡例

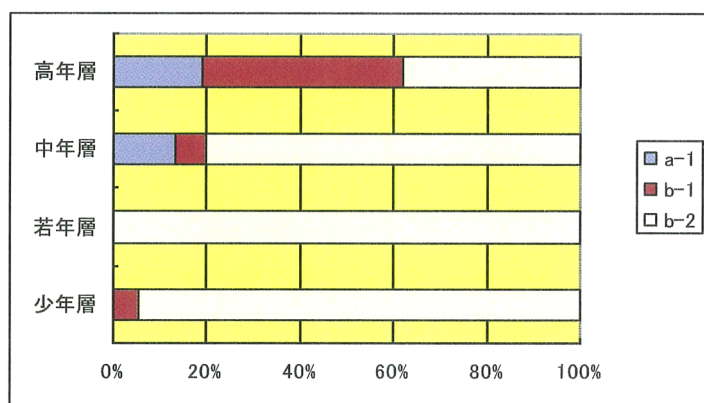
- ・ I E A O U : NHK男性アナウンサー10名の5母音フォルマント各平均値
- ・ 1~6 : 高年層6話者各個人の「梨」/nasi/・「茄子」/nassu/フォルマント値



複雑な合一化の様相はみとめられない。<sup>注5</sup> そればかりか、両音に紛れのないb-1に加え、<sup>注6</sup> アナウンサー平均値にほぼ重なるb-2をも同程度に同居させているという状況である。

また一方、以上を世代を降って順に見ると、<sup>注7</sup> 高年層段階で狭まりつつあったa-1（およびb-1）の割合は中年層段階でいよいよ限定的となり、若・少年層にかけてはさらにb-1～b-2への流れが急速である（参照、図4）。

図4 各世代における「梨」/nasi/・「茄子」/nassu/の実相



これらの世代的な動きとも関わることであるが、当該方言では、/si/と/su/の混同に関するこの手の問いに対しては一貫して否定的な立場がとられることが多く、まずその点において既見の/i/と/e/の場合とは大きく傾向を異にしている。話者によっては「そこまで自分は訛っていない」、「そ

れは大昔の話」といった反論が思いがけず強い口調で聞かれることもあり、/si/と/su/の混同という事態が、当該方言話者にとってはいかにも方言的な訛りを意識させる要素のひとつとなっている(したがって自身の発音として安易にはみとめたくない対象となっている)ことをうかがわせる。また、最終的にa-1を回答する話者の中にもb-1やb-2との使い分けの段階を示すものがあり、その点においても/i/と/e/の場合のようないわゆる生理的現象としての混同の事態とは性格が異なるということがいえる。

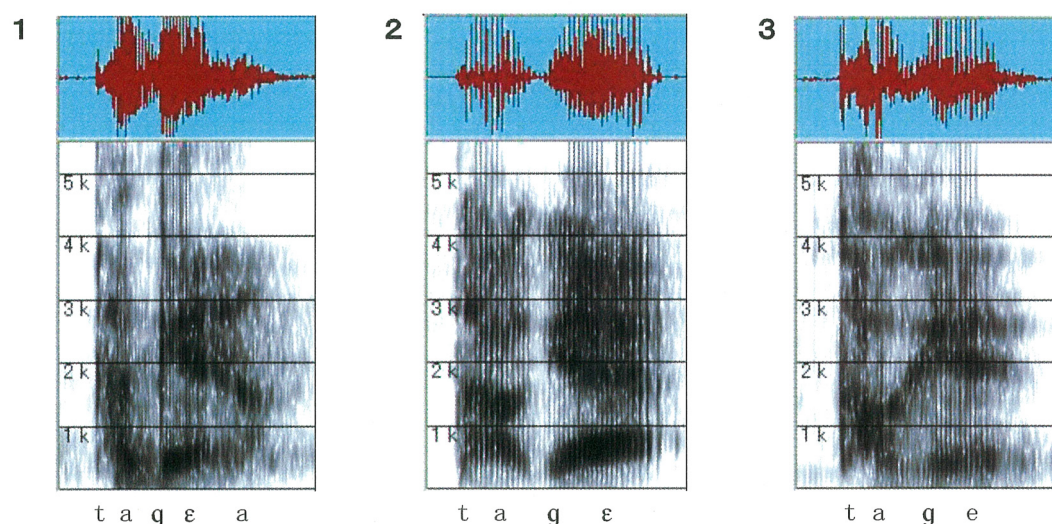
もともとこれらの事態は、近隣の石巻市方言や鳴子町方言(大橋純一 2003、同 2011)など、これまで南奥方言的なズーズー弁を呈してきた地域に共通してみとめられる傾向でもあり、気仙沼市方言の上記のような実態をもってその傾向はなお一層明確化したともいえる。北奥方言と南奥方言とが接する境界地域(岩手県中北部、新潟県北部)での複雑な様相を尻目に、当該方言をはじめとする南奥方言域では、今後、b-1やb-2といったいわゆる非ズーズー弁化の動きをさらに加速させていくことが予測される。

### 3.3 /-ai/ /-oi/連母音

#### 3.3.1 /-ai/

まず結論的なこととして、当該方言では世代を問わず、「高い」/takai/の連母音部はほぼ例外なく融合化する。しかしここでそれ以上に特筆されるのが、各融合結果音に世代・個人による大きな差が存することである。図5は、それらの差を象徴的に表していると思われるスペクトログラムに基づき、それぞれの音響的な特徴を見比べたものである(1・2:高年層男性、3:若年層男性)。

図5 「高い」/takai/のスペクトログラム



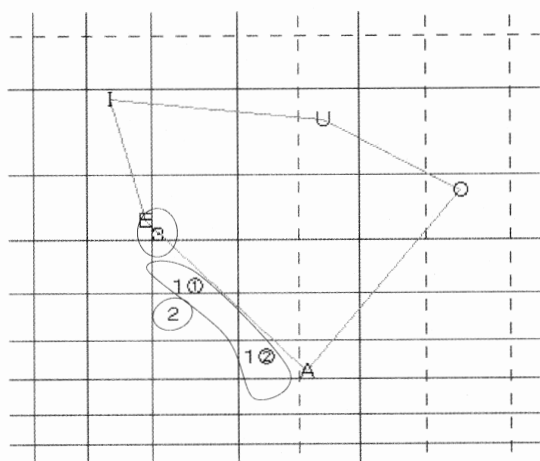
これらによれば、まず1において連母音内部でのフォルマント変動が著しい。<sup>注8</sup>つまり発音の経過に伴い第1フォルマントと第2フォルマントとが横V字型に接近していく様子がうかがえ、当該の発音が少なからず二重母音的な性質のものであることがわかる。また2と3では、フォルマント

自体は安定的であるが、その分布幅が大きく相違し、当二者間においても決して小さくはない実相差の存することがわかる。図6は、以上のスペクトログラムをもとにF1値とF2値とを抽出し、1～3それぞれの調音位置をF1-F2図上に拡大して捉え直したものである。

図6 「高い」/takai/の実相

F1-F2図 凡例

- ・ I E A O U : NHK男性アナウンサー10名の5母音フォルマント各平均値
- ・ 1①・②、2、3 : 高年層・若年層3話者各個人の「高い」/takai/フォルマント値



注) 1①と1②はそれぞれ1における発音初動部と終結部

これによれば、1の発音がその初動部から終結部にかけておよそエ<sub>r</sub>～アへの調音移動を呈していること、2がエとアの間相を呈していること、3がほぼアナウンサー平均値に重なるエを呈していることがうかがえる。つまり等しく融合音を志向しながらも、これらの三様のものが世代・個人により複雑に錯綜しているのが気仙沼市方言の現状なのである。さらに非融合音のものも含めてその全体像を捉えれば、当該方言の/-ai/連母音には、大きくは次のような実相パターンが併存していることがわかる。

a. 融合音

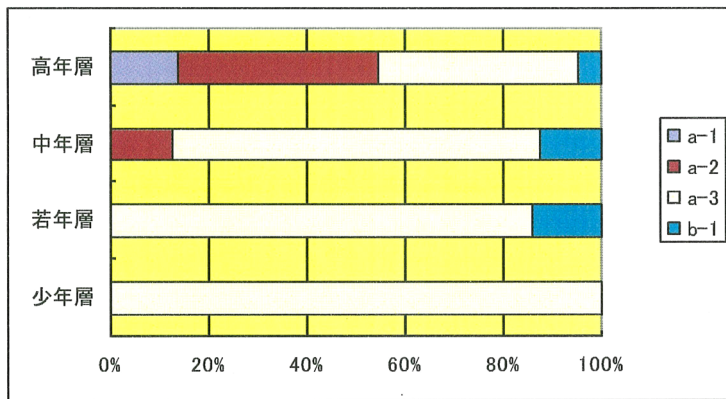
- a-1. 二重母音的な[-ea]
- a-2. アナウンサー平均値より広口の[-e:]
- a-3. アナウンサー平均値にほぼ重なる[-e:]

b. 非融合音

- b-1. アナウンサー平均値にほぼ重なる[-ai]～それよりもやや広口の[-ae<sub>r</sub>]

さて、これらのうち、特にaにおける実相差を融合原理の面から見てみると、a-1とa-2が元来の[ai]に由来してその中間相を呈していると考えられるのにひきかえ、a-3ではそのような連母音の名残はなく、[ai]が単純に独立した別音の[e:]にとって代わられていることを思わせる。前2者がまさに融合音と呼ぶにふさわしいならば、後者はむしろ代替音とでもいうべきか。なおこのことは、実相の世代別状況を見た以下の図7によって、さらにその意味が明確化する(参照、図7)。

図7 各世代における「高い」/takai/の実相

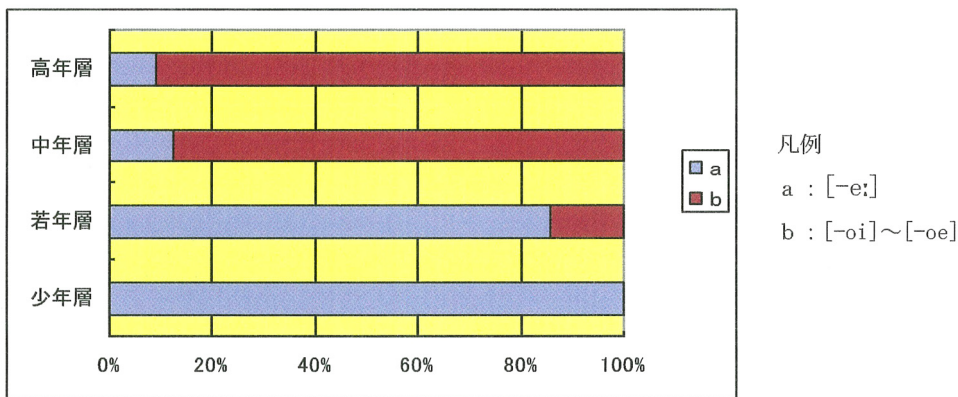


つまり、「高い」/takai/の連母音部は各世代ほぼ例外なく融合化するが、こと実相面に関していえば、a-1やa-2を主体とする高年層に対し、その痕跡をわずかにとどめる中年層を介しつつ、若～少年層へと一律にa-3へと刷新していく動きと読みとれる。これは、既調査の石巻市方言その他でもそうであったように、発音の上では等しく融合形をとりながらも、大きくは中・若年層を境に実相の対立が生じつつあること、具体的には大橋純一(2003)でいうところの「高年層の母音干渉(前後のaとiが相互に干渉し合った結果としての[-e:])に対する下位年層の一律[-e:]化(連母音部にもともと本人が体系として有している[e]をあてただけの[-e:])の差異」(11頁)を示唆していると考えられる。なお以上のことは、次の/-oi/連母音に見られる世代差の実態がさらに大きな傍証となる。

### 3.3.2 /-oi/

先の「高い」/takai/が多様な実相差こそ示しながらも融合の有無の点では世代差がなかった(ほぼ全世代が融合音を呈する実態にあった)のに対し、以下の「細い」/hosoi/においては一転、融合音には実相差が存しない一方、むしろ融合の有無の点で上位年層と下位年層とによる明確な対立がある(参照、図8)。注9

図8 各世代における「細い」/hosoi/の実相



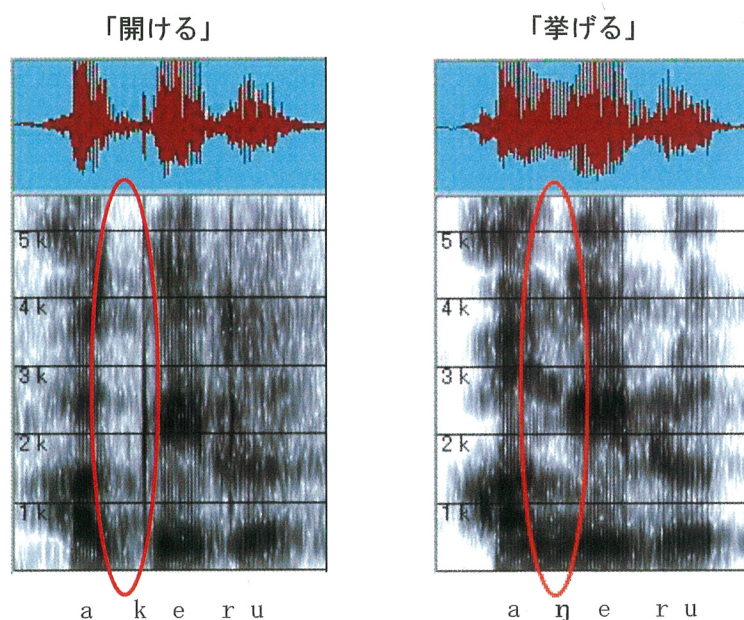


つまりは、“高・中年層：b（非融合音）” 対 “若・少年層：a（融合音）” の対立が単純・明白なわけであるが、ここで注目されることは、方言的な a（融合音）の出現がむしろ下位年層の側に特立すること、しかもその実相が同年層の/-ai/連母音にみとめられたのと同様、共通語音相当の[-e:]であるという点である。このことは、上位年層が元来の連母音構造に即して融合の可否を峻別し、融合音を結果させている（よって/-oi/はその構造上、融合の必然性に欠けるために融合化しない）こと、対して下位年層は連母音構造の如何に関わらず、一律[e]化の原理に従って融合化している（よって/-oi/にも/-ai/同様の[-e:]が現れる）ことを逆説的に物語っている。要するに当該方言の場合、連母音の融合化という事態は、その原理をより機械的に単純化しながら上位年層～下位年層へと展開し、またある意味では徹底さえしつつあることがうかがえるのである。

### 3.4 語中/k-/ /g-/

ここでは語中の/k-/ /g-/についてとりあげ、それらが当該方言でどのような弁別の実態にあるかを「開ける」/akeru/と「挙げる」/ageru/のミニマルペアに基づいて検討する。その際、特に大きな関心事となるのが近年全国的に衰退の傾向にあるといわれる/g-/の鼻濁音化に関してであるが、以下のスペクトログラムによっても検証されるように、その存在は当該方言において确实かつ顕著である（参照、図9）。

図9 「開ける」/akeru/・「挙げる」/ageru/のスペクトログラム

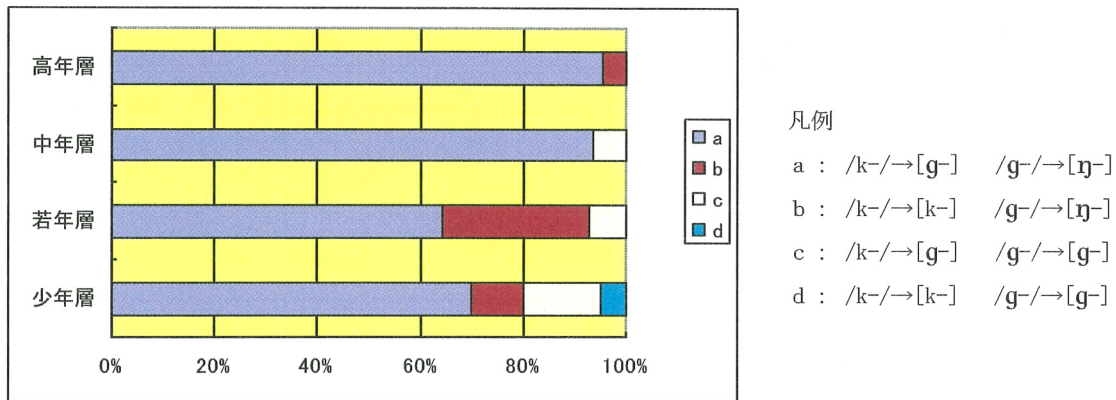


以上は、高年層男性1話者の「開ける」/akeru/と「挙げる」/ageru/のスペクトログラムを左右に対照して見たものである。これによれば、各囲い部分の対比からもわかるとおり、第一音節 (/a/)直後に閉鎖を表す空白模様が見える「開ける」/akeru/と、それが見えない「挙げる」/ageru/との間に、まずは大きな実相差のあることが確認される。また同時に、「挙げる」/ageru/には低帯域と

中帯域付近に周波数の黒いかたまりが色濃く見え、当該の箇所には鼻音要素が介在することが確認される。つまりこれらのことにより、左図「開ける」/akeru/が破裂音の[ageru]を、右図「挙げる」/ageru/が鼻濁音の[aneru]を実現させていること、よって両音に紛れはなく、[g-]と[ŋ-]とによる弁別の実態があることが客観的に見てとれるのである。

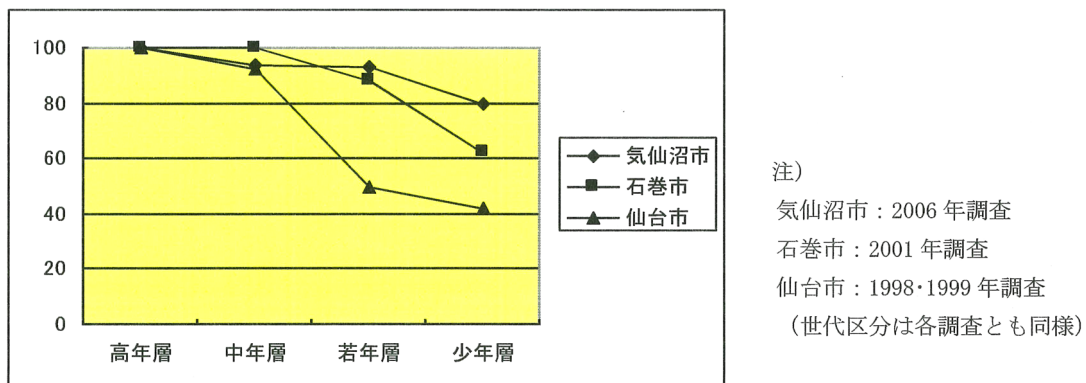
さて、以上のような弁別のものが当該方言でどの程度勢力を維持し、特に若い世代に向けてどう展開しつつあるかを見たものが以下の図 10 である。

図 10 各世代における「開ける」/akeru/・「挙げる」/ageru/の実相



これによれば、当該方言においては、語中の/k-/ /g-/が各々有声化・鼻音化して a に現れること、つまりは図 9 の各スペクトログラムのように明確な実相差を伴って現れることが、特に高・中年層の場合において圧倒的である。若～少年層にかけてはややその勢力に陰りが見える感もあるが、なお上位年層的な a は 60%強を占め、それに準じる b や c も加味するならば、当該方言ではほぼ全世代・全話者において何らかの方言要素が内在していることになる。とりわけ語中の/g-/に着目すると、その[ŋ-]としての出現は、高年層：100%、中年層：94%、若年層：93%、少年層：80%（各 a・b の総計）といった内訳となっている。下図は、その世代的な実態をさらに近隣方言と対比させて見たものであるが、この比較からも、当該方言が近隣の 2 都市などよりもかなり高い割合で[ŋ-]を保持しつつあることがうかがえる（参照、図 11）。

図 11 宮城県諸方言におけるガ行鼻濁音の世代別実態



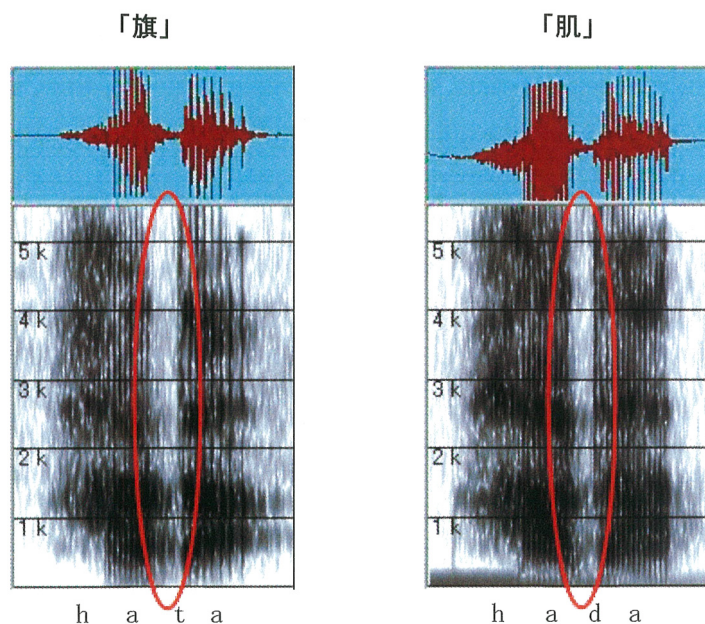
注)  
 気仙沼市：2006 年調査  
 石巻市：2001 年調査  
 仙台市：1998・1999 年調査  
 （世代区分は各調査とも同様）

既述のとおり、鼻濁音の消失は全国的な趨勢としてもはや待ったなしの状況であることが指摘されて久しい（馬瀬良雄ほか 2004）。東北はそうした動向に超然として[ŋ]を保持している唯一の方言であるが、その東北方言についても、大橋純一（2007a）では、図 11 における仙台市方言などの実態を根拠に、「一度その（筆者注. [g]化の）兆しがみとめられるとなれば、それ以降の変遷もかなり迅速であることが予測される」（210 頁）とした。しかし、気仙沼市方言の上記のような実態に即するならば、当該方言は必ずしもそれに当たらず、今しばらくは[ŋ]保持の状況が下位年層に向けて継続していくことが予測される。

### 3.5 語中/t-/ /d-/

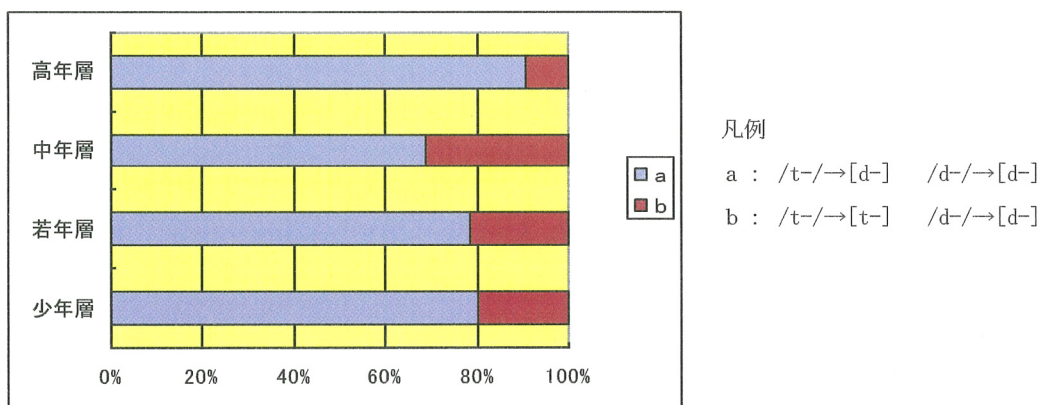
先の語中/k-/ /g-/が a（/k-/→[g-] /g-/→[ŋ-]）を中心に今なお方言要素を色濃く示す状況にあったのに対し、当ミニマルペアにおいては、特に/d-/の場合において方言要素の欠落が大きく、以下のスペクトログラムに見てとれるように、/t-/と/d-/とがほぼ同音に現れることが一般的である（参照、図 12）。

図 12 「旗」/hata/・「肌」/hada/のスペクトログラム



以上は、高年層男性 1 話者の「旗」/hata/と「肌」/hada/のスペクトログラムを左右に対照して見たものである。これによれば、発音過程の諸処において音響上の目立った相違はなく、とりわけ /t-/ /d-/の囲い部分は酷似していることがうかがえる。すなわち、図 9 の「開ける」/akeru/の場合と同様、第一音節（/ha/）直後に閉鎖を表す空白模様が介在しており、これによって両音が破裂音を呈していること、具体的には「旗」/hata/が有声化し、「肌」/hada/が非鼻音化して[hada]を実現させていることが客観的に見てとれるのである。なお、これらが世代を降ってどのような弁別の実態にあるかを見たものが以下の図 13 である。

図 13 各世代における「旗」/hata/・「肌」/hada/の実相



このようであり、当該方言では語中/d-/の鼻音化が全世代を通じて皆無であること、それにひきかえ、語中/t-/の有声化が世代を降ってもなお優勢であること、その結果、各世代が大差なく a の状況下にあることが明らかである。これらのことからすると、既見のガ行鼻濁音が近隣方言にも増して保持の傾向を鮮明にしていたのとは対照的に、語中/d-/の鼻音化は逆に近隣方言に先行していち早く衰微・消失したことをうかがわせる。<sup>注 10</sup> 当人たちの内省からも、/d-/が[~d-]のように発音される（かつてされていた）ことの意識は上位年層においてさえ明確ではなく、むしろその[d-]としての一貫した応答ぶりは、当該方言がかつて鼻音化地域であったことさえ疑わせるほどである。また、逆に語中/t-/の有声化が上記のように保持される現状に鑑みるならば、当該方言の語中/t-/ /d-/の実相は、今しばらくは a の状況を主体として、/t-/と/d-/とが区別されない非弁別的な段階が継続していくことが予測される。

#### 4 まとめ

以上の調査結果を踏まえ、気仙沼市方言の音韻特徴を改めて項目ごとに整理すれば、おおよそ次のようにまとめられる。

- 1) /i/と/e/が混同・合一化する事態は、特に高年層の場合において著しい。その実相も/i/と/e/との間と/u/との間とを縦横自在に行き交いつつ、同一世代にあっても多様なバリエーションを呈する状況下にある。しかし、そうした事態も中年層段階での落ち込みが著しく、さらに若・少年層にかけては共通語音への変化が著しい。
- 2) /si/と/su/が混同・合一化する事態は、1)の場合とは対照的に、現象の有無の面においても、実相上のバリエーションの面においても、方言的な要素をみとめしむるものがあまりない。特に中年層以降は中舌音～共通語音への推移が急速である。加えて話者の内省などからも、この合一化の事態を自方言の特徴として受け止める姿勢が積極的にはうかがえない。以上のことからすれば、当該方言における非ズーザー弁化の動きは、今後さらに加速・徹底していくこと

が予測される。

- 3) /-ai/連母音は全世代でほぼ例外なく融合化する。しかし[-ɛa]や[-ɛi]を主体とする上位年層に対し、下位年層では一律的に[-e:]が現れ、融合結果音という点において明確な世代差が存する。一方、/-oi/連母音では融合化しない上位年層とほぼ例外なく融合化する（[-e:]に現れる）下位年層とに対立があり、むしろ融合の有無という点で明確な世代差が存する。これらは、上位年層の融合化と下位年層のそれとが各々別原理に基づいて生じていることを示唆するものと考えられる。
- 4) 語中の/k-/ /g-/は、/k-/が有声化して[g-]に、/g-/が鼻濁音化して[ŋ-]に現れることが一般的である。若～少年層にかけてはさすがにその勢力に陰りが見える感もあるが、それでも/g-/の鼻濁音化は近隣方言などと比べると割合も高く持続的である。これらの現状を踏まえるならば、語中/g-/については、当該方言において今しばらくは [ŋ-]保持の状況が継続していくことが予測される。
- 5) 語中の/t-/ /d-/は、/t-/が有声化して[d-]に、/d-/が鼻音化せずに[d-]に現れる（よって2音が同音となり区別されない）ことが一般的である。中でも、/d-/が[~d-]となることの意識は話者当人の内省などからしてもきわめて稀薄であり、/d-/の鼻音化は、当該方言では比較的早い段階で消失したことがうかがえる。

## 注

1. ここでの世代区分は以下のとおりとする。  
高年層：60歳以上、中年層：40～50歳代、若年層：20～30歳代、少年層：高校生
2. 今石元久(1997)、今石元久ほか(1984)による。
3. ただし、同一個人内で複数の実相パターンが許容されることはなく、その点においては安定的である。
4. 各世代で話者数にばらつきがあるため、以下、実相パターンの割合を世代比で見ると、いずれもパーセンテージに換算して表すことにする。
5. 岩手県中北部と新潟県北部は、いずれも北奥方言的なズーズー弁と南奥方言的なズーズー弁とが接する境界地域であるが、これらの地域では、/si/に合一化するものと/su/に合一化するものとが地点・個人により複雑に交錯するほか、北奥方言的とも南奥方言的ともしがたい曖昧な中間音が見られる。
6. ただし、図3の右図からもうかがえるように、b-1の2話者の「茄子」/nasu/（図上の3・4）は全般に下方向への退縮が大きく、/su/の調音点が下がり気味であること、よって共通語音などよりは舌の緊張が伴いにくい発音状況であることが指摘される。
7. 「梨」/nasi/と「茄子」/nasu/に関しては、各世代で一部無声化して現れるものがある。図4ではそれが著しく、合一化音を特定できない2例（高年層1、若年層1）を除いてパーセンテージを出している。

8. スペクトログラムの横軸と並行して現れる帯状の縞模様のうち、下方から順に第1フォルマント、第2フォルマントと数える。
9. 話者によってはホセーやホソイ(エ)を回答した後に、別語形としてのホソコイ(エ)の存在を内省する場合があるが、ここではそれをとりあげず、融合の有無(つまりはホセーかホソイ(エ)か)のみを問題にする。
10. たとえば下記文献の大橋純一(1998)(2003)などでは、程度の差はあっても、少なからず/d-/が鼻音化して[~d-]となる現象は上位年層を中心に確実にみとめられた。

## 文 献

- 今石元久ほか(1984)『日本語方言音声のスペクトル分析資料』文部科学省研究費特定研究「言語の標準化」資料集
- 今石元久(1997)『日本語音声の実験的研究』和泉書院
- 大橋純一(1998)「子音の有声化と鼻音化」『文部省科学研究費補助金基盤研究(8) 宮城県中新田町方言の研究』宮城教育大学国語教育講座
- 大橋純一(2000a)「北奥方言・南奥方言接触地域における/si/ /su/・/ci/ /cu/・/zi/ /zu/」『国語学研究』第39集
- 大橋純一(2000b)「ガ行鼻音」『宮城県仙台市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 大橋純一(2001)「東北方言におけるガ行鼻音の動向」『文芸研究』第151集
- 大橋純一(2003)「音韻」『宮城県石巻市方言の研究』東北大学国語学研究室
- 大橋純一(2004a)「福島県相馬市方言における語中ガ行入り渡り鼻音」『国語学研究』第43集
- 大橋純一(2004b)「新潟県阿賀北地域における語中・尾ガ行音」『社会言語科学』第7巻第1号
- 大橋純一(2007a)「ガ行鼻濁音の実態と評価の変遷」『国語論究 第13集 昭和前期日本語の問題点』明治書院
- 大橋純一(2007b)「言語接触地域における/-i/ /-u/の実相と分布—新潟県北部方言の場合—」『音声言語研究のパラダイム』和泉書院
- 大橋純一(2011)「音韻」『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 金田一春彦(1954)「音韻」東條操編『日本方言学』吉川弘文館
- 柴田武(1962)「音韻」国語学会編『方言学概説』武蔵野書院
- 馬瀬良雄ほか(2004)「現代日本語におけるガ行鼻音の実態と共通語としての地位」『ことばと文化』第2号